令和８年度全国学力・学習状況調査の大崎市の結果について

1　調査の概要について

令和８年９月　大崎市教育委員会

【調査目的】　義務教育の機会均等とその水準の維持向上の観点から、
（１）全国的な児童生徒の学力や学習状況を把握・分析し、教育施策の成果と課題を検証し、その改善を図る。
（２）学校における児童生徒への教育指導の充実や学習状況の改善等に役立てる。
（３）そのような取組を通じて、教育に関する継続的な検証改善サイクルを確立する。

【調査実施日】　令和８年４月２３日（木）

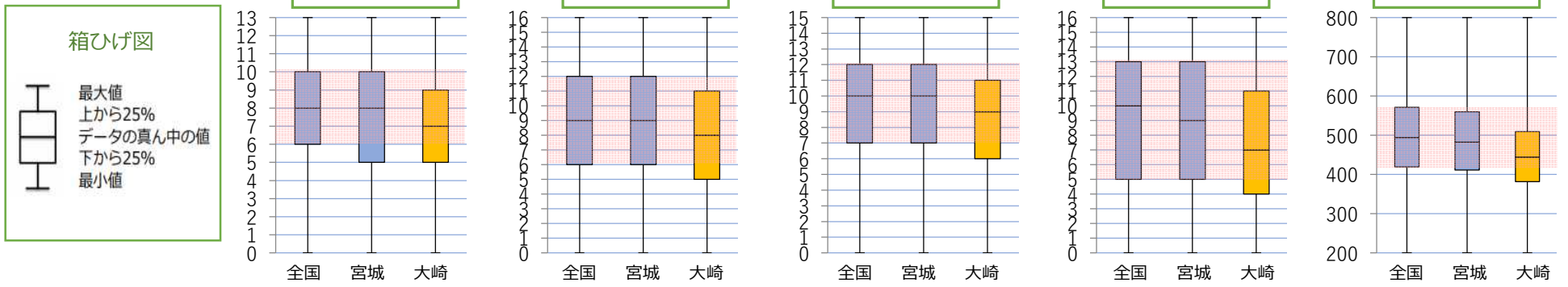
【調査対象・事項】　小・義務教育学校６年生：教科調査〔国語、算数〕 / 質問調査、中学校３年生・義務教育学校９年生：教科調査〔国語、数学、英語〕 / 質問調査

2　各教科の結果について

【平均正答数・平均IRTスコア結果／正答数・IRTスコアの分布】

※中学校英語はCBTで実施し、IRT（項目反応理論）に基づき算出したスコアにより結果を表示。IRT に基づいて各設問の正誤パターンの状況から学力を推定し、500を基準にした得点で表したもの。※（　）は前回調査

【小学校】**国語、算数ともに分布や中央値が県及び全国を下回っている**が、その**差は１問**である。また、**得点のばらつきは全国と同程度**である。
【中学校】**３教科とも分布や中央値が県及び全国を下回っている。数学は下方に分布**している。**数学及び英語の得点のばらつきは県や全国と同程度**である。



	小学校		中学校		
	国　語	算　数	国　語	数　学	英　語
大崎市	**6.9/13問**	**8.0/16問**	**8.4/15問**	**7.3/16問**	**448**
宮城県（仙台市含む）	7.6/13問	8.7/16問	9.5/15問	8.9/16問	489
全　国	7.9/13問	9.0/16問	9.6/15問	9.1/16問	499

令和８年度全国学力・学習状況調査の結果を受け、大崎市では**「学力向上は日々の授業改善から」を基本姿勢**としながら、児童生徒一人ひとりのよりよい学びにつなげる取組を、**学校・家庭・教育委員会が連携して一体的に**進めていく。

3　調査結果を踏まえた今後の取組について　－学校での取組－

－ 学校・家庭・教育委員会が連携し、学力向上へ －

授業改善１　学ぶ楽しさや達成感を実感できる授業づくり　－「主体的・対話的で深い学び」の土台づくりと実現に向けて－

授業改善２　ねらいと評価を明確にした単元構想　－カリキュラム・マネジメントの工夫を通して－

【教科に関する調査結果から】

小学校国語

○　相手に伝わるように、理由や事例などを挙げながら、話の中心が明確になるよう話の構成を考えることは概ねできている。
▶　引用して、自分の考えが伝わるように書き表し方を工夫することに課題が見られる。
▶　情報と情報との関係付けの仕方、図などによる語句と語句との関係の表し方を理解し使うことに課題が見られる。

引用する目的を明確にし、引用部分と自分の考えを区別して書くことを意識させる。また、目的に応じて情報を図示しながら整理する指導を行う。

中学校国語

○　助動詞の働きについて理解することは概ねできている。
▶　語句の辞書的な意味を踏まえ、文脈上の意味を捉えることに課題が見られる。
▶　文章を読んで理解したことに基づいて、自分の考えを確かなものにすることに課題が見られる。

語句の文脈上の意味や語句相互の関係を捉え、文章を精査・解釈することを意識させる。また、解釈した内容を振り返り、自分の考えを深める指導を行う。

【質問調査結果から】

◆　**分からないことや詳しく知りたいことがあったときに、自分で学び方を考え、工夫している**児童生徒ほど、各教科の正答率が高い傾向がある。
◆　**課題の解決に向けて自分から取り組んだ**と回答した児童生徒ほど、各教科の正答率が高い傾向がある。

主体的に学ぶ姿勢を育てるため、課題に見通しをもたせ、対話や振り返りを通して学びを深める。

小学校算数

○　立方体の体積の計算による求め方について概ねできている。
▶　体積の意味について理解することに課題が見られる。
▶　基準量、比較量、割合の関係を正しく捉えることに課題が見られる。

体積を単位のいくつ分として捉え、立体の形が違っても体積が等しくなることを理解させる。また、基準量との比較を通して、1.5倍や2.5倍などの割合の意味を捉え、割合についての理解を深める指導を行う。

中学校数学

○　事柄が成り立つ理由を文字を使って説明するための方針を立てることは概ねできている。
▶　過程や結果を振り返りながら、成り立つ事柄を予想し、数学的な表現を用いて説明することに課題が見られる。
▶　数学的に表現したことを事象に即して解釈し、問題解決の方法を数学的に説明することに課題が見られる。

数の性質について予想し、数学的に説明することを意識させる。また、問題解決の過程を振り返り、条件を変えて考えるなど、統合的・発展的に考察し、より適切な表現で説明する指導を行う。

◆　**中学校で国語が得意、国語が好き**と回答した生徒が**全国を上回る。**
◆　各教科において**好きと回答をした児童生徒ほど、各教科の正答率が高い**傾向がある。

教科への興味・関心をさらに高めるため、学ぶ楽しさや達成感を実感できる授業づくりを推進する。

各教科の無解答率

	小・国語	小・算数	中・国語	中・数学
令和８年	4.1%	3.4%	7.0%	15.9%
令和７年	4.0%	4.6%	9.3%	14.1%

小学校算数、中学校国語において、令和７年度調査より無解答率が下がった。小学校国語は同程度。中学校数学においては、最後の問題まで粘り強く取り組めるよう指導を行う。

中学校英語

○　日常的な話題について、必要な情報を聞き取ることは概ねできている。
▶　社会的な話題に関して読んだことについて、考えとその理由を書くことに課題が見られる。
▶　日常的な話題について、事実や自分の考え、気持ちなどを整理し、まとまりのある文章を書くことに課題が見られる。

文章の内容を捉え、自分の立場や考えを明確にして書くことを意識させる。また、理由や根拠を整理し、文と文とのつながりに注意して、読み手に伝わるように書く指導を行う。

◆　ICT機器の家庭での利用頻度が全国より高い（小学校100%、中学校91%）。
◆　**ICT機器を活用する自信がある**児童生徒ほど、各教科の正答率が高い傾向がある。

ICT機器の効果的な活用をさらに進め、学習効果の向上を図る。

4　調査結果を踏まえた今後の取組について　－家庭での取組－

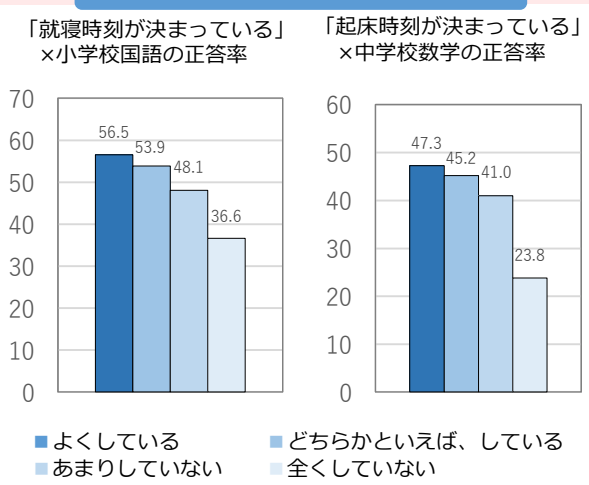
－ 学校・家庭・教育委員会が連携し、学力向上へ －　【質問調査結果から】

取組1　家庭学習の習慣化 －生活リズムの「３点固定」－

◆　**約９割の児童生徒が起床時刻が決まっている**と回答。しかし、**就寝時刻が決まっている児童生徒は、８割とやや低い。**

◆　**規則正しい生活習慣が定着している児童生徒ほど、各教科の正答率が高い**傾向がある。

生活習慣と正答率



生活リズムの「３点固定」とは、
①起床時刻
②家庭学習の開始時刻
③就寝時刻
の3つの時刻を毎日固定する生活習慣のこと。**十分な睡眠時間を確保**して体調を整え、**毎日決まった時刻に勉強**することで学習習慣を身に付けることができる。また、**自分で決めた時刻を守ることで、目標達成に必要な自己コントロール力も育む**ことにつながる。

取組2　家庭学習の時間の確保 －学習の量の向上－

◆　学校の授業時間以外の**平日**の勉強時間について、**１時間以上**勉強する児童生徒の割合は、**小学校で約40%、中学校で約50%。**

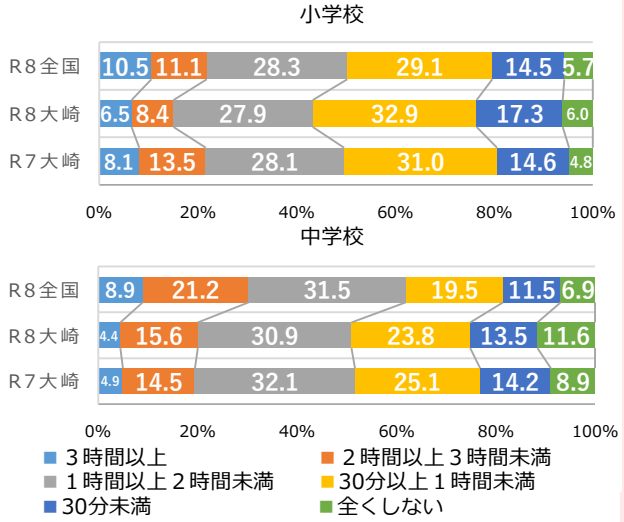
◆　平日において、１時間以上勉強すると回答した児童生徒は、**前年度より小学校は減少、中学校は同程度。**

◆　**休日**の勉強時間についても、**１時間以上**勉強する児童生徒の割合は、小中とも平日と同程度。

◆　平日の学習時間が**30分未満**の回答は、**小学校23.3%、中学校25.1%で、４～５人に1人**の割合。**全くしない**という回答は、**中学校11.6%。**

平日の学習時間

１時間以上
【小学校】**42.8%**（全国49.9%）
【中学校】**50.9%**（全国61.6%）



平日、休日とも、**家庭学習で一定の学習時間を継続して確保する**ことが必要。

取組3　家庭学習の内容の工夫 －学習の質の向上－

◆　分からないことや詳しく知りたいことがあったときに、**自分で学び方を考え、工夫することができる**と、**約75%**の児童生徒が回答。**約４人に１人**の割合の児童生徒は、**自分で学び方を考え、工夫することはできていない**と回答。

主体的な学習の調整

自分で学び方を考え、工夫することができる
【小学校】**76.1%**（全国79.4%）
【中学校】**75.9%**（全国78.2%）

◆　**新聞**を読んでいる児童生徒の割合は、**1割未満。**

新聞を読んでいる割合

【小学校】**6.8%**（全国10.0%）
【中学校】**4.5%**（全国6.2%）

◆　**家庭学習にICT機器を使用**している児童生徒は、**70%程度で全国をやや上回る。**

◆　ICT機器の使用時間では、**小学校では30分～１時間程度、中学校では30分より少ない**児童生徒が、**各教科の正答率が高い**傾向がある。

家庭学習でのICT使用率

【小学校】**68.1%**（全国65.8%）
【中学校】**67.2%**（全国62.4%）

①家庭学習の**目標設定**や、**学習内容の振り返り**を行う。
②**新聞や「よむYOMUワークシート」等を活用**して、読解力向上を図る。
③学習内容に応じて、**ワークやAIドリルを使い分ける。**特に**AIドリルは、間違いの傾向を分析して問題やヒントが自動で出題されるため個別最適化が可能。**

5　調査結果を踏まえた今後の取組について　－大崎市教育委員会の取組－

－ 学校・家庭・教育委員会が連携し、学力向上へ －

1　学力向上４つの柱に関する取組

（１）カリキュラムマネジメントの工夫
- **単元全体を見通し、ねらいと評価を明確**にした授業づくりを行う。
- **「学力向上年間計画」**を基にPDCAサイクルの循環促進を行う。また、年間および単元計画に基づいた**系統的な指導内容の見直し**を図る。

（２）授業改善
- 「主体的・対話的で深い学び」の実現に向け、**児童生徒自らが課題の解決に向けて考える場を確保**するとともに、**学習意欲を高める**工夫を行う。
- **「おおさきスタンダードみのり」**や**「授業評価シート」**を活用する。
- **学校園間授業・保育参観事業**による授業参観を通して、授業改善を図る。

（３）集団づくり
- 学級経営の質が学力にも直結することを意識し、**総合質問紙調査「i-check」等の活用**による実態把握を生かして**安心して学べる学級づくり**を強化する。
- 朝の会や帰りの会、日常のやりとり等を通して、**自己肯定感や学びに向かう意欲**を高める指導を行う。

（４）小中連携
- 小中学校間における**指導内容・評価の共通理解**を深め、スムーズな学びの接続を図るとともに、各校の学力向上につながる取組を行う。
- 研修会等を通して、中学校区の**児童生徒の実態や共通の課題を共有**する。

2　各種調査結果の活用

（１）全国学力・学習状況調査の結果の分析
- 成果と課題を明確にし、**学校の指導改善の計画に具体的に反映**させる。
- 校内研修等を通じて**結果を全職員で共有**し、**組織的な改善**につなげる。

（２）標準学力調査（東京書籍）の活用
- 全国学力・学習状況調査と併せて年２回の標準学力調査を**比較分析**し、学校全体で**つまずき解消期間も含めてPDCAサイクル**を確実に実施する。

3　読解力向上事業・学力向上推進事業

（１）よむYOMUワークシートの活用
- 朝学習や国語科の導入などで**継続的に使用する仕組み**を整える。
- 学校内外での実践を共有し、**活用方法の工夫と改善**を図る。

（２）ロイロノートの活用
- 思考の可視化や意見交流に活用し、児童生徒が**自分の考えを整理・表現**する場面を設ける。
- 他者の意見を共有することで**多角的な思考**を促すとともに、ペアやグループでの意見交換、カードの共有を通じて、**協働学習を充実**させる。
- プレゼンテーションなどの発表活動を取り入れ、**表現力の向上**を図る。

（３）タブレットドリルやAIドリルの活用
- 学習のつまずきを個別に把握し、**個別最適な学び**の実現を目指す。
- 児童生徒の活用状況を把握し、**継続的な取組が可能となるような仕組み**を構築する。
- ドリルの結果を教師が把握し、**指導に生かすサイクル**をつくる。

4　家庭学習の充実

（１）学習習慣の定着
- 家庭学習の**目標設定や振り返り**を取り入れ、児童生徒が**主体的かつ目標を持って取り組める**工夫をする。
- 家庭学習用教材として、**ワーク**や**AIドリルを活用**する。
- **授業と家庭学習を関連付け**、より効果的な取組になるように工夫する。

（２）家庭との連携強化
- 学校・学級だよりや懇談会等で**継続的に情報発信**し、**保護者と家庭学習のあり方や学習状況を共有**する。
- **スマートフォン等のメディアの使用**について、使用時間や時間帯の制限を設けるなどの**家庭でのルールづくり**を推進する。

学力向上の実現は、学校・家庭・教育委員会の協働が欠かせないものであり、大崎市においては、学校・家庭・教育委員会がそれぞれの立場から、児童生徒1人ひとりの成長を支え、未来を切り拓く力を育んでいけるように各取組を推進していく。